

## 観音寺城・安土城・八幡山城

滋賀県立大学名誉教授 中井 均

### ◆はじめに

- ・日本城郭の革命的变化 ⇒ 土の城から石の城へ【近江守護佐々木六角氏の居城観音寺城の石垣は日本で最古級の本格的な石垣】
- ・織豊系城郭の成立 ⇒ 石垣・瓦・礎石建物という3つの要素から成り立つ城郭【織田信長の安土築城】  
信長、秀吉の城では ⇒ 石垣【高石垣】、瓦【金箔瓦】、礎石建物【天守(主)】  
戦う城から見せる城へ ⇒ 政権のシンボルとしての城郭【以後の近世城郭の構造を決定付けた】
- ・近江八幡市の三大城郭 ⇒ 観音寺城【最古の石垣の城】、安土城【織豊系城郭の成立】、八幡山城【豊臣政権の東国進出への司令塔】

### ◆観音寺城の構造

- ・建武2年(1335)の北畠顕家西上を阻止するため佐々木氏頼により「観音寺ノ城郭」布陣 ⇒ 東山道を押さえる要衝であるとともに古代からの信仰の山でもあった【極めて南北朝的な山城】
- ・寺院と共存する城郭 ⇒ 西国三十三観音霊場である観音正寺の存在【その聖なる山に守護佐々木六角氏が居城を求めた】  
守護が聖地を保護することを領民に知らしめる選地であり、一方守護は聖地によって守られるという構図  
観音寺城の所在する徹山(標高432m) ⇒ 巨岩、巨石が露頭する山【三国岩、万石岩、女良岩】  
仏の降臨する岩山 ⇒ 磐座【奥の院と呼ばれる巨石の岩陰には平安時代後期の摩崖仏が刻まれている】  
伽藍と共存して築かれた山城 ⇒ 山頂(仏の降臨地：奥の院)や観音正寺を避けて西尾根に選地【本丸・平井丸・池田丸と呼ばれる主要部は山頂に位置しない】  
戦国時代に観音正寺は一時山麓に移される ⇒ 守護権力が上位となる【山頂部にまで城郭部が増築される】
- ・日本最古級の城郭石垣 ⇒ 弘治2年(1556)の記録『下倉米銭下用帳』(金剛輪寺)に「御屋形様石垣打」などと記されている【織田信長の安土築城20年前!】  
石垣の構造 ⇒ 石材は徹山の湖東流紋岩【驚くべきことに自然石ではなく人工的に割っ

た石材が用いられている】

その割り方 ⇒ 矢穴技法と呼ばれる採石技法【母岩に小穴を列点状に開け、その穴に楔(くさび：これを矢と称する)を入れ、玄能(げんのう)で叩いていくと、小穴に沿って割れる。いわゆる切手のミシン目】

観音寺技法 ⇒ 観音寺城の石垣に用いられた矢穴技法は小穴を列点状に開けるのではなく、2穴、3穴のみの矢穴割る技法【石の目を読む熟練の工人による割石工法】

※近江では小堀城山城、三雲城にも矢穴技法で割られた石材が用いられている

- ・ 山上の礎石建物 ⇒ 通常の実城は軍事施設としての詰城であり、居住空間は有さない

【観音寺城では主要部の本丸、平井丸、池田丸で礎石建物が検出された】

本丸【常御殿】、平井丸【会所】、池田丸【主殿】という構造か

さらに山上の曲輪には伊庭屋敷、目賀田屋敷、後藤屋敷、進藤屋敷など被官の名前が冠されている ⇒ 家臣団の山上への集住化【そこで守護も山上に居住空間を持つこととなる】

- ・ 山麓の居館 ⇒ 伝御屋形【高さ4mを超える石垣によって構えられている】

しかし一辺70mは近江守護の屋敷としてはあまりに狭い(通常守護館は一辺一町の方形館) ⇒ 居館は山上の本丸【伝御屋敷は山麓に構えられた大手玄関と考えたい】

#### ◆安土城の構造

- ・ なぜ、安土の地に織田信長は城を築いたのか ⇒ 琵琶湖を意識した選地【さらに山を意識した】

※小牧山、岐阜(金華山)ともに山城であること

そうならば必然的に安土山となる ⇒ さらにもうひとつ重要な点が聖地を選んだこと【安土山に存在する「薬師山」】

※小牧山【問々乳観音出現霊場】、岐阜城【丸山の烏帽子岩：伊奈波神社故地、山科言継の立ち寄った「上之権現」】

- ・ 石垣(高石垣)、瓦(金箔瓦)、礎石建物(天主)という3つの要素によって構成される城郭 ⇒ 以後の日本城郭に大きな影響を与える【織豊系城郭の成立→近世城郭】

- ・ 石垣は誰が積んだものなのか ⇒ 信長はすでに永禄6年(1563)に小牧山城で、永禄10年(1567)に岐阜城で石垣による築城をおこなっている

安土城の石垣構築にこうした小牧山城、岐阜城の石垣構築に携わった職能集団が動員された可能性は高い ⇒ 穴太衆の関与は江戸時代の2次資料に登場するに過ぎない【傘下として参加した可能性】

- ・ 石垣の特徴 ⇒ 「大石を撰取り、小石を撰退けられ」、「蛇石と云ふ名石にて勝たる大石に候間、一切に御山へ上らず候。然る間、羽柴筑前・滝川左近・惟住五郎左衛門三人として助勢一万余人の人数を以て、夜日三日に上せられ候」(『信長公記』天正4年4月朔日)【黒金門、二ノ丸では長辺2mを超える巨石が用いられている】

- ・ 瓦 ⇒ 金箔瓦と家紋瓦の出現【奈良衆による造瓦】

信長時代の金箔瓦 ⇒ 信長【安土城】、信忠【岐阜城】、信雄【松ヶ島城】、信孝【伊勢神戸城】

- ・古代以来の寺社造営技術の再編成 ⇒ 戦国大名の成し得なかった発想の転換【「墨絵に梅の御絵を狩野永徳に仰付けられ(略)、上一重のかなくは後藤平四郎仕候。京・田舎衆手を尽し申すなり。二重めより京のたい阿弥かなくなり。御大工岡部又右衛門、塗師首刑部、白金屋の御大工宮西遊左衛門、瓦、唐人の一観に仰付けられ、奈良衆焼き申すなり」(『信長公記』天正4年条)】
- ・柴田勝家進上の石 ⇒ 「七月十一日、越前より柴田修理亮黄鷹六連上せ進上。并切石数百、是又進上申され候なり。」(『信長公記』天正9年(1581)7月11日条)  
切石進上とは ⇒ 越前で採れる貴重な石材 ⇒ 笏谷石(凝灰岩)【福井市足羽山で採掘】  
越前青石、青石とも呼ばれる
- ・安土城に用いられた笏谷石 ⇒ 本丸取付台(天主東帯曲輪)から天主穴蔵に至る石段中腹(踊り場)に敷かれている【天主玄関敷石として用いられた】  
石段正面(東側)の前列に6枚の笏谷石切石を敷き、後列に8枚の笏谷石切石を北端部と南端部で2枚の切石を横位に敷き、その間に4枚の切石を縦位に敷く ⇒ 後列部分には南北で横位に置いた切石の後ろに礎石が据えられている【切石の寸法は長辺79cm、短辺46cm、厚さ5cmを測る】
- ・安土城の北限 ⇒ 大手道と呼ばれている南面の登城道から天主台までの安土山南面のみが議論されてきた【北面は安土山全域が安土城と思われてきた】  
八角平以北には石垣が存在しない ⇒ 八角平は二段に構えられた高石垣と下段に喰違虎口【高石垣(遮断線)と虎口(北虎口)】  
八角平の石垣の特徴 ⇒ シノギ角によって七角形の平坦面を構築【出隅部を仰角に組む工法】  
八角平こそが安土城の北限として築かれた高石垣

#### ◆八幡山城の構造

- ・天正13年(1585)に羽柴(豊臣)秀次により築城 ⇒ 同時に水口岡山城(中村一氏)が築城、佐和山城には堀尾吉晴が入れ置かれる【山の城郭網】  
※長浜城には山内一豊、大津城には浅野幸長が入れ置かれる  
八幡山築城には前年の小牧長久手合戦が大きく影響 ⇒ 徳川家康が三河、遠江、駿河、伊豆、信濃の5ヶ国を領有し、織田信雄が尾張を領有【近江の隣国とその東部が軍事的国境地帯となる】  
このため秀吉は居城大坂を防御するため近江を最前線とする  
八幡山城 ⇒ 下街道を押さえる八幡山に新規築城:豊臣秀次(実質的な領国支配は「関白殿一老」の田中吉政)  
水口岡山城 ⇒ 東海道を押さえる岡山(古城山)に新規築城:中村一氏  
佐和山城 ⇒ 中山道を押さえる佐和山城を改修する:堀秀治(後に堀尾吉晴)が入城【天正

### 13 年体制】

- ・八幡山城の石垣は基本的には天正 13 年(1585)に構築されたものと考えられる ⇒ しかし本丸北西隅部の算木積、矢穴技法によって割られた石財使用【限りなく文禄年間に近い】

※北垣聰一郎氏編年の I 期-3(文禄年間)に相当か(『石垣普請』による)

天正 13 年(1585)築城のものでない可能性 ⇒ 天正 18 年(1590)に秀次が清須城に移り、替わって京極高次が入城するが、文禄 4 年(1595)に廃城となる【現在の石垣は部分的に京極高次によって限りなく文禄 4 年に近い時期に改修された可能性が高い】

※さらに江南洋氏(元近江八幡市郷土資料館館長)によると、本丸西側石垣内部の埋没した石垣の存在が語られている

- ・出丸の石垣は南東隅部が角部ではなく丸く収められている ⇒ 日本城郭の石垣は必ず隅角部を設けるなかで極めて異例な収め方【岩盤上に積み上げるために角部を構えられなかった結果か】

※樹木を伐採することで初めて明らかとなった

- ・金箔瓦を葺く城 ⇒ 山城域や山麓の秀次居館などから出土している金箔瓦【秀吉から金箔瓦を葺くことが許された城であった】

織豊系城郭の金箔瓦 ⇒ 誰でもが葺くことは許されなかった【金箔瓦は許認可制】

秀吉時代の金箔瓦 ⇒ ①本人(秀吉)と一族の城【本人:大坂城・伏見城・聚楽第・石垣山一夜城・肥前名護屋城、秀次:八幡山城・清須城、宇喜多秀家:岡山城、毛利輝元:広島城、蒲生氏郷:会津若松城、最上義光:山形城】、②徳川家康領に接する城【松本城、小諸城、上田城、沼田城、駿府城】、③聚楽第～肥前名護屋城間の城と社寺【興隆寺、離宮八幡宮、高槻城、巖島神社、小倉城】

- ・八幡山城の天守 ⇒ 八幡山城最大の謎【天守台がない】

「江州蒲生郡八幡山豊臣関白秀次古城之図」(寛政 10 年:1798)には天守台が描かれる  
昭和 37 年の瑞竜寺建設に伴う発掘調査で検出された本丸御殿の礎石建物 ⇒ 天守台を伴わない天守礎石の可能性

- ・秀次居館 ⇒ 詰城としての山城【防御空間】と、屋敷としての山麓居館【居住空間】という二元的構造

極めて戦国的な構造 ⇒ 実は天正 13 年体制の佐和山城も水口岡山城も同じ構造【近江の臨戦体制を端的に示す】

- ・秀次居館の発掘調査 ⇒ 巨大な石垣に囲まれた空間から検出された礎石建物【居館施設】

遺構面を覆うように貼られた粘土層と破碎された瓦【秀次居館を封印する破城(城割り)】

- ・出土した金箔瓦 ⇒ 瓦当面の凸部に赤漆を塗り金を貼る【きらびやかな金色を創出】  
沢瀉紋【秀次の家紋か】、桐紋【豊臣の後継者として】の金箔鬼瓦

- ・山麓に人工的に巡らされた水堀 ⇒ 琵琶湖と直結【防御と水運】

こうした山麓を囲い込む水堀も天正 13 年体制の佐和山城と水口岡山城も同じ構造 ⇒  
しかし城下を囲い込む惣構の堀ではない【居館と武家地を囲う】

※但し八幡では鉄砲町を堀内に収容する(佐和山では火箱町) ⇒ 鉄砲や刀鍛冶、鋳物な  
どの武具・武器を生産する職人は堀内に集住

#### ◆おわりに

・日本城郭史上最も重要な 3 つの城が近江八幡市に所在する ⇒ 単に集まったのではなく  
近江八幡の有する地政学的な立地【城郭の聖地】

・城郭の本質的価値は土木的な軍事的防御施設である ⇒ 建物ではなく土木施設が重要で  
ある【残された本物の石垣】

観音寺城 ⇒ 日本最古の本物の石垣が残されている

安土城 ⇒ 織田信長が天正 4 年(1576)に築いた本物の石垣や、信長が城中に建立した摠  
見寺二王門、三重塔が残されている

八幡山城 ⇒ 豊臣秀次が天正 13 年(1585)に、あるいは京極高次が天正 18 年(1590)以後  
に築いた本物の石垣が残されている

これらをいかに見てもらうか ⇒ 樹木の伐採管理、城道の整備、立ち入り区域の拡張  
そして 3 城を巡るルート【交通手段、パンフレット、統一された遺構のサインなど】

★建物復元という令和の 1/1 模型などまったく必要なし【本物に勝るものはない】